

日本人の「きれい好き」に関する一考察

—新型コロナウイルス対応との関係から—

森 一郎

はじめに

令和 3 (2021)年に入ってから新型コロナウイルス(Covid-19)の日本での感染は収まる気配を見せていない。しかしながら欧米諸国での感染者や死亡者数と比べてみると、日本でのそれが少ないのも事実である。世界からみると日本では特に強権的な手段を採っていないにも関わらず、少ないのは「奇跡」とも言われている。

では、何がそうした「奇跡」をもたらしたのか。「マスクの着用率が高い」、「BCG 接種と関係があるのでは」、「過去に類似のウイルスが流行したからだ」など諸説が生まれている。また欧米諸国に比べて国民の「民度」のレベルが違うからだ、という麻生太郎副総理兼財務相の指摘もあった。

そうした中で、iPS 細胞の研究で知られる京都大学の山中伸弥は、感染者数や死亡者数が少ない要因を「ファクター X」と呼んで多くの可能性を挙げているが、その中で注目すべきは、日本の文化の中にその要因の一つを挙げている点である。すなわち「日本人はマスクや入浴など清潔意識が高いこと。もしくはハグや握手、大声で話すことが、欧米より少ないという文化的なこと」⁽¹⁾などの点である。一言でいえば日本人の「きれい好き」がその要因の一つではないか、というのである。これに関して日本中世史を専門とする本郷和人は、日本人の単なる「きれい好き」だということだけでなく、その根底には「穢れに対する日本人の意識や、^{けが}禊文化が重要である」⁽²⁾と、さらに踏み込んだ指摘もしている。

以上の点を踏まえ、本稿では、日本人の「きれい好き」に関する原因、

(1) 山中伸弥 (2020 年)「ウイルス VS.日本人」『文藝春秋』6月号、98頁。

(2) 本郷和人、井沢元彦 (2020 年)『疫病の日本史』宝島社新書、3頁。

および具体的に現れた諸現象について考察する。最初に「きれい好き」の原因と考えられる地理的・風土的な側面から検討する。次に具体的な現象として生活の視点、言語の視点、そして宗教の視点から考察し、最後にそれらの諸現象を相互関連的に図示しながら検討していく。

1. 日本人の「きれい好き」の原因 —地理的・風土的要因—

日本人の「きれい好き」の原因を考える場合、日本では日常的にきれいな水がふんだんに使えることが、一つの背景になっている。具体的には日本の国土及び日本の川が諸外国と比べていくつかの特徴をもっているからである。

日本の国土の約 3/4 は山地及び丘陵地で、国土の 2/3 は森林である。4 つの主要な島から成る日本列島、特に本州中央部には 3,000m 級の急峻な高山が連なっている。すなわち細長い列島の真ん中に背骨のように山々があるため川が急勾配になっており、流れの速い川が多い。そのため日本の河川水は洪水時を除き、よく澄んでいる。さらに河川の水量の源泉である降水量は年平均約 1,700mm にも達し、全世界平均値の約 2 倍である⁽³⁾。文部省唱歌の代表的な歌の一つである「故郷」の一節に「水は清きふるさと」とあり、日常的にきれいな水に接していたことがわかる。

このように日本では、澄んだ、きれいな水が豊富に使える環境にあったのである。こうしたことから日本人の「きれい好き」が生じたということがいえる。

2. 日本人の「きれい好き」の諸相

(1) 生活文化の視点より

日本人の「きれい好き」は生活習慣の中に見ることができる。これを「生活文化」としてとらえる。

多くの日本人は、自分は「きれい好き」であると思っている。では外国

(3) 以上の日本の川についての記述は、高橋裕ほか編著（2009年）『川の百科事典』丸善を参照した。

の方から見た日本人はどのように写っているであろうか。日本人の「きれい好き」に関しては、幕末から明治にかけて日本に来た外国の方々の記述に、その辺りの様子を知ることができる。

安政3(1856)年、日米修好通商条約の調印のため日本に来たタウンゼント・ハリスは下田近郊の柿崎を訪れて、次のような印象を抱いている。

「柿崎は小さくて貧寒な漁村であるが、住民の身なりはさっぱりしていて態度は丁寧である。世界のあらゆる国で貧乏にいつも付き物になっている不潔さというものが、少しもみられない。彼らの家屋は必要なだけ清潔さを保っている」⁽⁴⁾(傍点は筆者。以下同様)。

ハリスは、この村は貧しい村であるが、不潔ではないと感じたのである。

さらに、イギリスの初代駐日公使を務めたオールコックは日本の様子を次のように述べている。

「よく手入れされた街路は、あちこちに乞食^{こじき}がいるということを除けば、きわめて清潔であって、汚物が積み重ねられていて通路を妨げるということはない。(中略)一般に日本人は清潔な国民で、人目を恐れず、たびたびからだを洗い(はだかでも別に非難されることはない)、身につけているものはわずかで、風通しのよい家に住み、その家は広くて風通しの良い街路に面し、そしてまたその街路には不快なものは何物もおくことを許されない、というふうにいうことをはばからない。すべて清潔ということにかけては、日本人は東洋民族より大いにまさっており、とくに中国人にはまさっている」⁽⁵⁾。

日本での伝染病に関しては、ジャパンヘラルド社編集者のブラックが幕末開港後の横浜で流行したコレラについて次のように記している。

(4) ハリス、坂田精一訳(1954年)『日本滞在記・中巻』岩波文庫、14頁。

(5) R・オールコック、山口光朔訳(1962年)『大君の都—幕末日本滞在記—上』岩波文庫、199-288頁。

「多分、住民の身体の清潔なことが、伝染病を防いでいたのだらう。というのは、毎日熱い湯に入浴しない人はほとんどいなかったし、少なくとも一日おきに入浴しない人はめったになかった」⁽⁶⁾。

明治の時代に入り、日本での近代的水道敷設に貢献したイギリス人のH・S・パーマーは、本国に送った手紙の中で日本について次のように記している。

『清潔第一』というのが、日本人には極めて重要な処世訓のようだ。朝早くから夜遅くまで何時でも開いている浴室の中で、いつ果てることもなく、身体をこすり軽石で磨き洗う姿を見ればそれがわかる」⁽⁷⁾。

このように見てくると、幕末から明治にかけて来日した欧米人からみると、日本は豊かとはいえないが、日本人は清潔だというのが、一般的な見方であったといえる。

また、現代においては韓国の初代文化相を歴任した李御寧^{イオリョン}が、その著書である『「縮み」志向の日本人』の中で、次のような巧みな比喩を用いて述べている。

「日本人はもっとも清潔な民族として知られています。湿気がフランスの二倍といわれる国ですから、風呂好きはさておいても、武士が刀をかたときも離さなかったように、日本人はまた^{ほうき}箒をかたときも離さなかったのです」⁽⁸⁾。

現代の日本でみられる「きれい好き」については次のような現象を指摘

-
- (6) J・R・ブラック、ねずまさし・小池晴子訳（1970年）『ヤング・ジャパン1』平凡社東洋文庫、97頁。
(7) H・S・パーマー、樋口次郎訳（1982年）『黎明期の日本からの手紙』筑摩書房、14頁。
(8) 李御寧（2007年）『「縮み」志向の日本人』講談社学術文庫、145頁。

することができる。すなわち、多くの日本人は、ほぼ毎日風呂に入って常に体を清潔に保とうとしている。湯船の中では石鹸やタオルは使わない、つまり湯船の湯を汚してはいけないという習慣がある。家に入る時は靴を脱ぐというのも、部屋の中を汚さないということであり、またトイレに入る時はわざわざスリッパを履き替えている。食事の前にはおしぼりなどで手をきれいにする⁽⁹⁾。さらに掃除の習慣をみると、日本独自のものも見られる。特に学校現場では生徒たちが教室やトイレの掃除をしている。日本以外のほとんどの国は、掃除は掃除を受け持つ人の仕事である。生徒たちが掃除するのも、教室やトイレをきれいにする事だけでなく、掃除をすることが生徒指導、ひいては心の成長にも大切なことだと考えられているからである。つまり掃除は教育の一環なのである⁽¹⁰⁾。

以上のように、日常生活のいたるところで、きれいにしていこうという日本人の傾向が見られるのである。

(2) 言語文化の視点より

きれいな水が豊富な国土で生活してきた日本人は、水に関する多くの言語を残している。これを言語文化としてとらえ、いくつかの事例を挙げて考察していく。

水に関する言葉や慣用句については、たとえば次のような例をみることができる。

水いらず、水心あれば魚心、水に流す、水も漏らさぬ、水をあける、水を打ったような、水を得た魚のような、水を向ける、水くさい、水をさす、水もしたたる、水みずしい、などである⁽¹¹⁾。また日本人は「すみません」という言葉を陳謝の時以外にも日常的に使っているが、民俗学者の荒木博之によると、「すむ」は「澄む」と同義であるという。すなわち「すみません」とは水が澄んでいない、つまり水がよごれた状態にあることを表して

(9) 吉木誉絵 (2019年)『日本は本当に「和の国」か』PHP研究所、25頁。

(10) 小泉和子・渡辺由美子 (2020年)『ものと人間の歴史 184・掃除道具』法政大学出版社、44-45頁。

(11) 芳賀綏 (2004年)『日本人らしさの構造—言語文化論講義』大修館書店、233-234頁。

おり、そのことを陳謝する言葉だというのである⁽¹²⁾。水に関する言葉としては、水くさい、水をさすなどの表現はやや否定的に使われることが多いが、多くの例では肯定的な意味で使われている。特に「水に流す」という表現は「たがいの間にあったこれまでのいざこざや気まずいこだわりを、すべてなかったことにする」⁽¹³⁾という意味であり、このことは水を使って不純なものや汚物、さらには心の中の邪心を洗い流すという意味で、後に宗教文化の節で述べる^{みそぎ たらえ}禊や禊という行為にも通じる表現である。

この禊や禊は、日本では古来より日常生活の中でも行われていた行為であり、次のように日本最古の和歌集である『万葉集』にもみることができる。

○君により言の繁きを故郷の 明日香の川に禊ぎしに行く

卷四、八代女王

訳 君ゆえに噂がやかましく立つので、私は故郷の明日香川に禊ぎをしに行く⁽¹⁴⁾。

○玉久世の清き河原に禊ぎして 斎ふ命は妹がためこそ 卷十一

訳 玉久世の清らかな河原に禊ぎして、清斎し祈願する命は妹(妻、筆者注)のためならばこそだ⁽¹⁵⁾。

○中臣の太祝詞言言ひ禊へ 贖ふ命も誰がため汝 卷十七 大伴家持

訳 中臣の太祝詞言を唱えて禊えをし、幣を手向けて祈願する命は誰のためか、お前のためだ⁽¹⁶⁾。

また小倉百人一首の中にも、よく知られた禊の歌がある。

(12) 荒木博之(1980年)『日本語から日本人を考える』朝日新聞社、59-60頁。

(13) 尾上兼英監修、旺文社編(1992年)『成語林—故事ことわざ慣用句』旺文社、1079頁。

(14) 多田一臣訳註(2009年)『万葉集全解2』筑摩書房、98頁。

(15) 多田一臣訳註(2009年)『万葉集全解4』筑摩書房、294頁。

(16) 多田一臣訳註(2010年)『万葉集全解6』筑摩書房、340-341頁。

○風そよぐなら櫛の小川の夕暮れは 禊みそぎぞ夏のしるしなりける 従二位家隆
 訳 風がそよそよ吹いているならの小川の夕暮れは。もう秋の涼しきで
 すが、禊が行われていることで、まだ夏であることがわかります⁽¹⁷⁾。
 (筆者注:この句は六月禊と称して、水で身を清める夏の行事のことをうたっている)

さらに、水を使って凶事や汚物を洗い流してよい状態にするという点に
 関しては、日本最古の歴史書である『古事記』の中にも次のような話が載
 っている。

火の神を生んだ為に死んだ伊邪那美命いざなみのみことに会うため、死者の国である黄泉
 の国に行った伊邪那岐命いざなぎのみことであったが、変わり果てた姿を見て逃げ出してし
 まうのであった。そして自分の身に付いた穢れけがを祓はらうため河原で禊みそぎを行っ
 た。その結果、伊邪那岐命いざなぎのみことは次々と神々を生んだが、最後に天照大神あまてらすおおみかみ、
 月読命つくよみのみこと、建速須佐之男命たけはやすきののおのみことの三柱みはしらが誕生することになった。この三柱は貴
 い神という意味で「三貴子さんきし」と呼ばれている。

これは川のきれいな水で禊をしたことによって、忌むべきものが取り除
 かれ、貴い神が生まれたことを表しており、禊の重要性を示す話として解
 釈することができる。

また大国主命おおくにぬしのみことの話の部分にも、きれいな水で洗い流すことにより、良
 いことが起こったという話がのっている。

大国主命おおくにぬしのみことの兄たちに騙されて、海水に浸かったことによって傷がより
 ひどくなったウサギであったが、大国主命おおくにぬしのみことが河のきれいな水で体を洗う
 ことを教え、その通りにするとウサギの傷が癒えるのであった。ウサギは
 そのお礼と言って、大国主命おおくにぬしのみことに対して、美しい八上姫やがみひめとの結婚を予言し、
 その通りになるのである。

この話も、きれいな水で洗い流すことによって、吉事が訪れることを暗
 示している。

言語文化の最後として、日本人の「きれい好き」を象徴する言葉として

(17) 吉海直人 (2012年)『百人一首で読み解く平安時代』角川選書 516、267頁。

「きれい」、「きたない」の対語を検討する。

「きれい」、「きたない」に関しては、「体がきれい」、「体がきたない」など身体の状態を表すと同時に、「お金の使い方がきれい」、「お金の使い方がきたない」など、モノに対する態度にも使われ、さらに「心がきれい」、「心がきたない」など人間の内面の心の状態を表す言葉としても使われている。すなわち、きれい=善、きたない=悪なのである。

このように見てくると、日本人がいかに「きれい」にこだわっているかがわかる。

(3) 宗教文化の視点より

日本人の「きれい好き」の特徴は、神道を始めとする宗教文化の中に顕著に見られる。神道においては明浄というのが人間本来の姿であり、神が好まれる姿でもあるとされている。そして人が明浄な心身であることで初めて神と交流し、融和できると考えられている。

そのため、神と向き合うためには心身についた穢れ^{けが}を祓^{はら}わねばならない。では、穢れとは何か。穢れとは不浄不潔のことであるが、神道では人の死や出産などの出血などの不浄も穢れといわれている。また穢れは「罪穢れ^{つみ}」といわれるように罪とセットになって表現される場合がある。この場合の罪とは「自ら犯した罪も、知らず識らずに犯した誤ちも身体上の不具廢疾又は諸種の疾病も、また不可抗力である天変地異すらもすべて広く〈罪〉の概念に入れている」⁽¹⁸⁾のである。

こうした穢れや罪を祓^{みそぎ}って明浄な状態にするのが禊^{はらえ}や祓である。禊とは「身^み滌^{すす}ぎ」を語源としている。また「身^みを灌^{そそ}ぐ」の意だとの解釈もある。いずれにしても、元々は水に浸かって体を清めるところから禊は始まっている。一般的な方法としては、沐浴^{みづこり}や水垢離などがある。いずれも水が重要な役割をしている。また禊は表面的には肉体の穢れを洗い清めることであるが、単に肉体だけでなく、むしろ精神的に心の罪穢れを祓^{はら}い清めるこ

(18) 佐藤武 (1942年)『みそぎの話』有精堂出版、168頁。

とに多くの意味を見出すことができるのである⁽¹⁹⁾。悪事に対して償いをすませた場合、「禊を済ませた」という言い方をしている。清く明るい心は清明心せいめいしんとよばれ、人の心の理想的なあり方を表している。

祓は「祓う」の意味であって、身につけていた穢れを祓い除けることを指しており、所謂「お祓い」という行為によってそれが行われる。

さらに罪穢れは、身体についた不浄な「衣」のようなものであって、禊や祓によって、取り除き洗い流せるとされている。そのことから罪穢れを流せば人間本来の戻るといわれている。そうした点から、日本人の「罪」に対する意識は「罪を悪にくんで人を悪にくまず」という考え方が生まれたのである⁽²⁰⁾。またこれは「水に流す」という考え方と相通じる側面がある⁽²¹⁾。いずれにしても、悪事や凶事は体に付いたゴミのようなものであるので、それを何らかの方法で取り除いてしまえば、元の状態に戻ることができると考えられたのである。

以上のように、豊富なきれいな水が得られる日本では、穢れた体や精神を禊や祓によって取り除くことができるとする神道の考え方が生じ、それが日本人の「きれい好き」という生活様式の中に反映されている。また反対に、日本人の水に親しむ生活様式そのものが、神道の形式を生んだとも言える。

いずれにしても、日本人の水に対する意識は、神道という宗教文化と切っても切れない関係となっている。

3. 日本人の「きれい好き」に関する相互関連的諸相

以上、日本人の「きれい好き」を生活文化、言語文化、そして宗教文化という三つの視点で検討してきた。しかしながら、それぞれは単独で存在するのではなく、当然のことながらお互いに影響しあって現象として表れてくる。すなわち相互関連的な状況なのである。

(19) 同上、170頁。

(20) 鈴鹿千代乃「罪を悪んで人を悪まず —日本人の罪の意識」(2007年)『アジア遊学』No.101、勉誠出版、48-58頁。

(21) 樋口清之(1989年)『日本人はなぜ水に流したがるのか』エムジー、47-48頁。

そこで、お互いがどのように影響しあっているかを図示したのが、次の図 1 である。

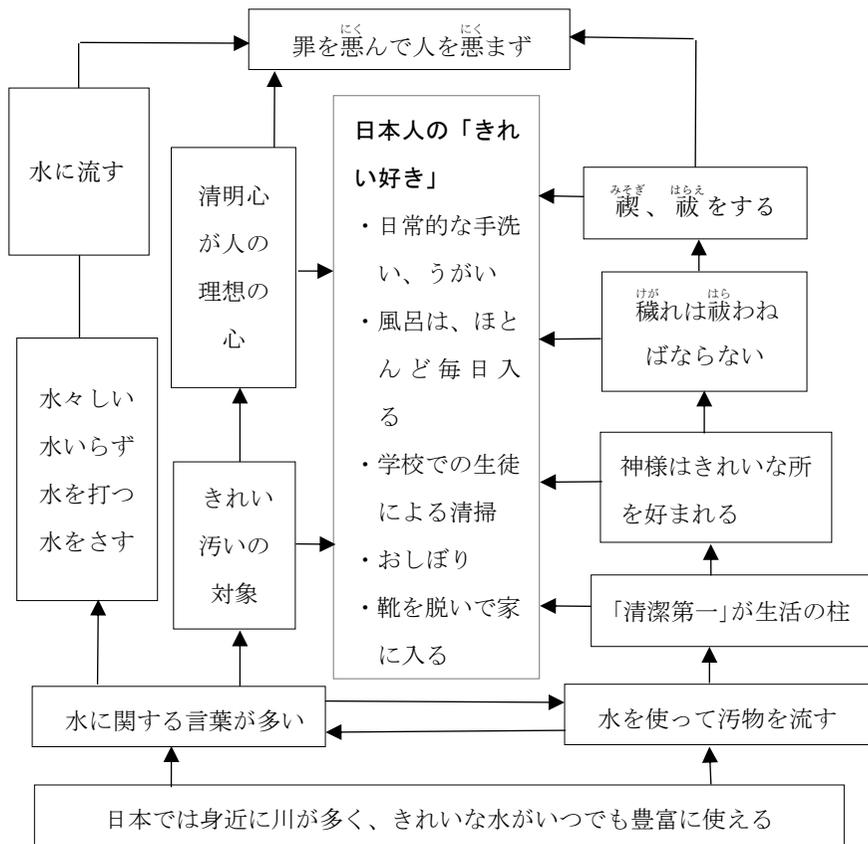


図 1 「きれい好き」に関する相互関連図

日本人の「きれい好き」の出発点は、日本では、きれいな水が豊富に使えるという点である(図 1 の下部)。そこから、水を使って汚物を流すことや、水に関する言葉が多いことなどが生まれた。水が使えたことから、清潔第一の生活習慣が成り立ち、それが神道の^{みそぎ へらえ}禊、祓まで発展していく。水に関する言葉が多く生じたが、中でも「きれい」、「きたない」は身体や

身の回りの様子だけでなく、心の状態をも言い表すようになっていった。また体や心の穢^{けが}れは身に付いた「ゴミ」のようなものであり、禊^{けが}や祓^{けが}などを行うことにより、取り除くことができるとされ、そこから「罪^{にく}を悪^{にく}んで人を悪^{にく}まず」という考え方も生まれた。こうした諸要因が重なって、日常的に手洗い、うがいなどをするという日本人の「きれい好き」という習慣が生まれたと思われるのである。

結論

本稿では、新型コロナウイルスの感染が欧米諸外国と比べて少ないという点に着目して、日本人の「きれい好き」についてその原因や、諸相について検討してきた。

その結果、日本人の「きれい好き」については異論はないものの、では感染が広がっている他国は、きれい好きではないのか、と問われれば即答はできないのも事実である。この点については文化人類学や比較文化論などの知見を基に検討する必要があるが、これは今後の検討課題としたい。

最後に、本稿のテーマとは少し離れるが、水の問題は全世界的な課題となっている。国際連合のSDGs(持続可能な開発目標)は6番目に「安全な水とトイレを世界中に」を掲げている。我が国の天皇陛下も、水問題には大いに関心がおありと伺っている。清潔な水で手を洗い、清潔な水を使う温水便座が普及している日本の状態が何らかの形で世界に貢献できればと思いつつ、本稿の筆を置くこととする。

[参考文献]

小野泰博ほか編著(1985年)『日本宗教事典』弘文堂。